

そよかぜ通信

●巻頭言

子どもと大人の

生活空間と時間をつなぐ

2

上智大学グローバル教育センター 准教授
文部科学省 国立教育政策研究所フェロ
丸山英樹

●授業実践①

スタートカリキュラム
の実践

子どもに「つなぐ」という見方

4

東京都江東区立北砂小学校 教諭
橋本靖子

●授業実践②

私とこの子どもたち
だからこそでできる

8

総合の授業

鹿児島大学教育学部附属小学校 教諭
小園博臣

スクリーンに輝く

先生たち

おすすめ先生映画あれこれ

12

シネマナリスト
まつかわゆま

●こだわり館裏付！⑩

練馬区立美術館 東京都練馬区

16



教育出版

子どもと大人の生活空間と時間をつなぐ



上智大学 グローバル教育センター 准教授
文部科学省 国立教育政策研究所 フェロー
丸山英樹

国際調査で見られた「学力」と現実社会

日本では2015年6月と7月に測定されたOECD生徒の学習到達度調査（PISA ピザ）の結果が、2016年12月6日に全世界で公表された。3年に1回実施されるPISAの今回の結果では、日本の15歳児の読解力は下がったと単純に報道されているものの、国際的な国別平均値としては高い学力が確認された。今回の調査は、2000年から2012年まで過去5回にわたって測定された「道具を活用する」能力に加えて、初めて「異質な集団でやり取りする」能力の測定を試みた。後者の能力については、まだ報告されるに至っていないが、日本の少子化とグローバル化がより進む社会においては、価値観の異なる世代間や異文化間で協働しながら目的を達成する重要な能力を指す。学力向上や能力獲得などに関する議論では個人の教育・学習成果が重視されることが多いが、後者の能力観では、皆が同時期に同じ能力を画一的に習得すること以上に、異なる得意な能力をもつ者どうしが協働することにスポットライトを当てている。また今回からすべての測定は、紙と鉛筆ではなく、他の先進国同様にすべてコンピュータの画面とキ

ーボード入力によるものとなった。

PISAの測定方法や研究デザインにおける技術的な課題は山積しているものの、国際調査の限界として私たちが留意しておきたいのは、言語・文化の違いとグローバル社会の現実である。言葉の音をそのままスベルで表現できる言語に比べ、漢字やカタカナに入力変換させて文章を完成させる日本語では、開発途上にある測定システムを用いた今回の調査においては解答速度がコンピュータの性能に左右されることもある。3年以上かけて問題開発を行うPISAでは文化的に優劣の出ないよう配慮されるが、問題文の中で新品の書籍がディスカウントされていたり、通貨単位がドルやユーロで使われるセントが利用されていたり、日本の生活環境からは異国情緒あふれる出題内容にみえることもある。これらの点から、厳密な意味で「日常生活に即した知識と技能の応用力」を純粋に国際比較することは難しい。ただし、そうしたさまざまな格差や限界を抱えた上で、切っても切れないグローバル社会の影響を受ける私たちの仕事や生活の現実を思い起こすと、それは調査手法の問題とは言い切れず、むしろPISAはそうした実社会を反映させた調査であると捉えることも可能である。

「学力」は、 誰の、何のためか？

そのようにグローバル社会の生活における能力を測定しているならば、それは誰の、何のための「学力」なのか。この点については、常に反省的かつ丁寧な議論が求められる。日本の子どもの学力や国内外のランキングについて一喜一憂するのは、オリンピックゲームのようで他人事であるうちは楽しいかもしれない。しかし、こうした国際調査が示す結果を横から縦にするだけでなく、客観的とされる「学力」の高低や有無について、大学や高校の入学試験に加えて、今や小学校や幼稚園でも問われるようになり、保護者たちもそれに応じている日本において、例えば、どういう大人になってほしいと考えるか。PISA とは別に、OECD が実施した成人教育調査（PIAAC）では、日本の大人の学習態度や意欲がとても低いことがわかっている。子どもの頃から「社会で求められるから」という理由だけで知識と技能を画一的に獲得させることは、価値観の多様化が進んだグローバル社会において、すべての子どもに対して妥当な方法とは必ずしも言えず、むしろ「もう勉強はうんざり」という態度を育てることになるかもしれない。仮に無事に卒業、就職できた若者が、人生の意味を消費活動にのみ見出すならば、一生ずっと競争を続けることを最優先するかもしれない。高度な「学力」は、それを身につけた者にとって、どういう意味があったのだろうか。

これまでの教育は、価値の継承を重視していたという校長先生がおられる。これからは、価値の創造に向けた教育が重要だともいう。著者は、同感である。例えば、「持続可能な開発のための教育（ESD）」は2005年から2014年まで国際的に展開され、また日本国内でもユネスコスクール・

ネットワーク（ASPnet）をはじめ多くの教育実践が広がった。ESD が志向するものは、次の4点だとされる。すなわち、①持続可能な社会の構築に学習内容を関連づけ、②教員を含めた「学習者」が相互的・探究的・活動的に学習できるよう学習環境を整備し、③現在と未来世代への責任を意識しながらシステム思考や協働的意思決定プロセスを重視し、④自らの変容と社会の変容に向けて互いに元気づけることである。そのESDを含め、2015年秋には2030年を目標とする「持続可能な開発目標（SDGs）」が国連で採択され、私たちの生活様式を問い直すことになっている。

また、12月22日に公表された中央教育審議会では「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領などの改善及び必要な方策などについて（答申）」では、SDGsに関連し、世界とそこにおける日本を広く相互的な視野で捉え、社会の中で自ら問題を発見・解決していくことを重要視している。その上で、SDGsをふまえつつ、自然環境や資源の有限性、国内外の貧困、革新的な取り組み、地球規模・足元の課題を自らの課題として考え、持続可能な社会の構築につなげていく力を育むことを言及している。

学校で教わるものは本来的には実生活に直接役立つ場面は少ないが、それを通して高度な思考能力を高め、行動力へつなげていく学習環境を整えることは重要である。ただし、教員も保護者も、子どもとともに「これは、いかなる意味があるのか」と自問を続ける生涯学習によってのみしか、さまざまな変化に応じる、変化を起こしていくことにはつながらないだろう。ここに、生活空間及び時間と学校教育を直結できる、生活科・総合的な学習時間の可能性が見出だせる。学校の先生方の不断の努力だけでなく、学校の外にいる者も、緩やかに見守ることが求められる。

スタートカリキュラムの実践～子どもにとってという見方～

東京都江東区立北砂小学校 教諭

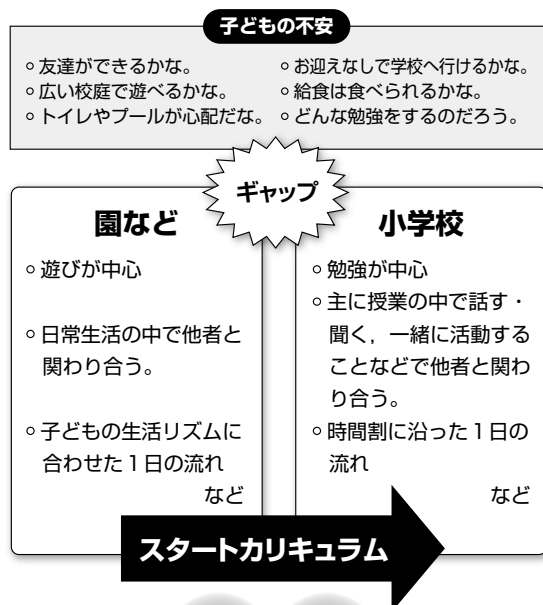
橋本靖子

1 教師にとって安心な子どもたち？

私は教員8年目であり、これまで2回1年生担任を経験しているが、自分にとって都合のいい子どもにしていたのではないかと振り返る。先生の顔をうかがい、こうすれば先生が喜ぶと動く子どもにしていたのではないかと。そして、これまで自分が実践してきたスタートカリキュラムは教師にとって安心する適応指導であったと反省している。

そこで、3回目の1年生担任時には「子どもにとって安心」という視点で、スタートカリキュラムを実践した。実践にあたり国立教育政策研究所から発行された「スタートカリキュラム スタートブック」、横浜市立鶴見小学校、東京都大田区立松仙小学校の実践を参考にしている。

2 スタートカリキュラムの必要性

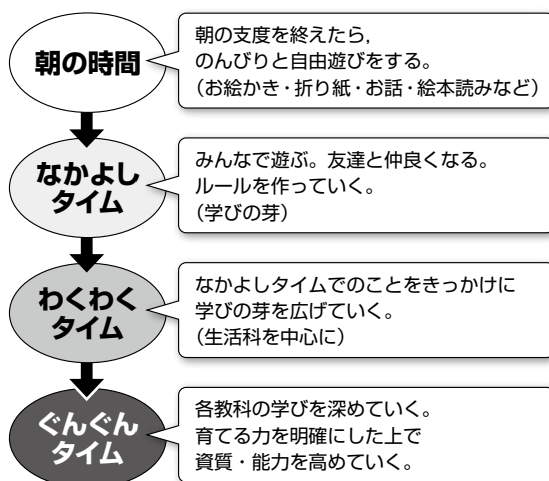


子どもは学びの芽生えであるさまざまな経験を園などでしている。そして、子どもが園から小学校へ入学する時のギャップは私たちの想像以上に大きい。

入学当初は、園などでの経験を引き出ししながら子どもの生活リズムに合わせて過ごすと、子どもは安心して主体的に自己を発揮することができる。そして、生活科を核として楽しいことや好きなことに没頭する中で生じた疑問や発見を大切にして学ぶ意欲を高め、小学校での自覚的な学びへと繋げていくスタートカリキュラムが必要であると実感している。

3 実践① ～1日の流れと4週間カリキュラム～

園での生活リズムに合わせて、1日の流れをこのように設定した。



入学後4週間のカリキュラムイメージ

校時	1週目	2週目	3週目	4週目
朝	朝の時間	朝の時間	朝の時間	朝の時間
1	なかよし	なかよし	なかよし	なかよし
2	なかよし	わくわく	わくわく	わくわく
3	わくわく	わくわく	わくわく	ぐんぐん
4	ぐんぐん	ぐんぐん	ぐんぐん	ぐんぐん

入学後4週間は、なかよしタイム→わくわくタイム→ぐんぐんタイムを図のように移行する。子どもや学校の実態に応じて、5週目以降は朝や学活の時間になかよしタイムを入れ、1時間目はわくわくタイムやぐんぐんタイムとして、生活科や国語など各教科の学びへと繋げていく。

実践② ～なかよしタイム～

「園では何をしたの？」と子どもに問いかけると、子どもは生き生きとした顔でやって見せる。なかよしタイムでは子どもが先生役。遊びを通して、クラス全員が仲良くなり、名前も覚える。ただ遊ぶのではなく、わくわくタイムやぐんぐんタイムに繋げる活動も取り入れる。



▼園で経験したエビカニクス→運動会や保幼小連携に繋がる

▲園で経験した遊び「ゲッツ、だるまさん」など



なかよし
タイム



▲算数ブロックでかたち遊び→算数的活動に繋がる

なかよし
タイム



▲広い校庭で思い切り体を動かすことで緊張がほぐれる

▶学年単位で遊ぶとクラスが離れてしまった同じ園の友達と遊ぶことができ、子どもはより安心できる。学年で屋上探検・校庭遊びをした



実践③ ～生活科を中心に学校探検～わくわくタイム～

なかよしタイムで緊張がほぐれ、学校は楽しいなと実感する子どもたち。外から戻って手を洗う水道が園と少し違っていることに気付く。「園ではどうだった？」と聞くと、園では手を拭くペーパーがある、麦茶を飲むコップがあるとのこと。「小学校ではペーパーがないから、ハンカチが必要だね」「水道の蛇口を上に向けると水が飲めるよ」このように、小学校での水道の使い方や必要な物について必要感をもって子どもたち自身が学んでいく。教師が教え込むことではない。

「ほかにも園と違う所がありそうだね」という教師の声掛けで、学校探検に行くことになった。探検に行くルールを確認しながら、最初はクラス全体で探検した。

探検を繰り返しながら、小学校では園長先生でなく校長先生がいて、校長先生の部屋があること、音楽室にはいろいろな楽器があること、ケガをしたら保健室へ行くこと、学校をきれいにしてくれる主事さんがいることなど、たくさんの発見をする子どもたち。

たくさんの発見の中で、「部屋の中をもっと見たい!」「校長先生は何の仕事をしているの?」といった思いや疑問が生まれ、自分の疑問を解決するためにグループもしくは個人で探検をすることになった。そして、「部屋に入る時は何て言うのかな?」挨拶やインタビューの仕方について国語で学習することになった。また、「園では下駄箱にマークがあったよ」という、下駄箱での子どものつぶやきから、「自分のお気に入りマークを作ろう」ということになり、図工の時間で作成することになった。



実践④ ～各教科の学びへ～ぐんぐんタイム～

わくわくタイムで学習する必要性を実感し、さらに他学年が授業を受けている様子を見て、小学校で勉強することを心待ちにしていた子どもたちは学習に対して意欲的である。また、なかよしタイムで友達と関わり合う楽しさを実感しているため、グループ活動では協力して取り組む。



▲グループ活動（伝え合いの場面）

園での経験を引き出すという視点で、図工の取り組みを以前と変えた。これまでは、教師が用意した同じこいのぼりの絵に色を塗っていたのだが、今回は絵描き歌としてそれぞれが思い思いにこいのぼりの絵を描いた。すると、子どもが歌いながら何度も何度も描くので、教師は描き方の指導がじっくりとできた。そして個性豊かなこいのぼりの絵が完成した。



▲下絵からすべて子どもたちが描いた個性豊かなこいのぼりの絵

④「子どもにとって安心」のスタートカリキュラムを実践してみよう

①～主体性が育つ～

これまでの私は、「最初が肝心」と規律を重視していたがために子どもの自由な発想をつぶしていた。もちろん規律は必要であるが、「長い目で見て1年生の学年末までにここまでできていればよしとする見方」に変わった。スタート時には、園でそうであったように子どもにとって安心し、一人一人の子どもが伸び伸びと自己を発揮できる場を作ると子どもの主体性が育つことがわかった。その主体性こそが、その後の学校教育における協同的で深い学びの基礎となる。

子どもは安心して、たくさんのことをつぶやく。そのつぶやきこそが子どもの思考であり、教師はそのつぶやきをつぶさずに引き出す必要がある。スタートカリキュラム実践後、「先生、～したいです」と主体的に行動する子どもの姿をたくさん見ることができた。

スタートカリキュラムの実践 ～子どもにとってという見方～



▲学習では、一人で取り組む時とグループで協力して取り組む時のメリハリがつき、グループ活動が増えた（6月国語。各自で言葉集めをした後のグループでの発表準備の場面）



▲6月、保幼小連携では、子どもが主体となって企画・実行した。その後3回の連携でも、子どもたちが考え内容が充実していた（エビカニクスを踊っている場面）



▲前期は、朝学習の時間になかよしタイムを行っていたが、後期からは朝学習に切り替え、子どもたちが担当して学習内容を決めている（7月、なかよしタイムの読み聞かせの場面）

②～園での育ちと学びを繋げる必要性～

子どもが主体的に行動する姿を見ていると、園での経験が基になっている。就学前の子どもたちは、遊びや生活を通して先生や友達との関わり方、工夫してより楽しくする、好きなことに没頭して粘り強く取り組むなど、さまざまな育ちと学びを経験している。その育ちと学びを引き出し、小学校で積み重

ねることで、子どもの主体性はより育つ。すなわち園で学んできた協力する・自分で考える・解決するなどといった力を、子ども自身が本来もっているという「肯定的な見方」を教師がしなくては、子どもから引き出すことはできない。

園での経験を知るためには、保幼小連携がよい機会である。お互いを行き来し、環境設定や子どもの実態を見ることができる。園の先生との会話から、園と小学校との違いや入学時に子どもが感じるギャップを実感することができる。「子どもにとってという見方」を共有することで、交流内容や日々の実践を改善することができる。

③～保護者・学校との連携～

1・2年生の担任時は、生活科を経験していない保護者の方に学級通信や保護者会で生活科についての説明をしている。1年生1回目の学校公開では、授業中の子どものたくさんのつぶやきや、グループ形式になってわいわいとやっている姿を見て、保護者の方が「落ち着きがない」「子どもが好き勝手に話している」との感想をもたれたようである。一斉授業で先生の話を静かに聞く授業スタイルを想像していたのであろう。保護者の方には、「授業規律は1年かけて身につけていくこと。今は子どものつぶやきをつぶさずに、友達との関わり合いを大切にしていること」を伝え、「子どもを長い目で見ていくこと・子どものできた姿を見逃さずに肯定的に見ること・子どもの～したいという主体的な姿を支援すること」をお願いした。

また、学校全体でも「4月の1年生は学校の主役」として、「0からのスタートでないこと」やスタートカリキュラムの周知をして、新1年生を迎え入れ、関わり方を全体で共有する必要がある。

「子どもにとってという見方」の転換を図ることで、本当の意味でのスタートカリキュラムができた実践である。この見方は、入学時のみならず各学年、各学期のスタートでも共通して言えることである。

「私と この子どもたちだからこそできる

鹿児島大学教育学部附属小学校 教諭

こ その ひろ おみ
小 蘭 博 臣

はじめに

「私とこの子どもたちだからこそできる総合の授業って何だろう？」

常々、自身に問いかける。授業中、子どもたちにも問いかける。

「それって、君たちにしかできないことか？」

現任校に赴任して7年間、低学年を担当し、生活科の研究・実践を重ねてきた。そして、8年目には中学年、9年目には高学年を担当し、総合を研究・実践するようになった。生活科を研究していた私だからこそできる総合の授業をしたい。これが、本実践を行った8年目のスタートラインであった。そして、冒頭述べた自問へとつながっていった。

本稿では、「私と この子どもたちだからこそできる 総合の授業」を旨とした昨年1年間の実践をまとめて紹介したい。

1 私がい描く体験プロセス

「総合にも、もっと遊びの要素を……」

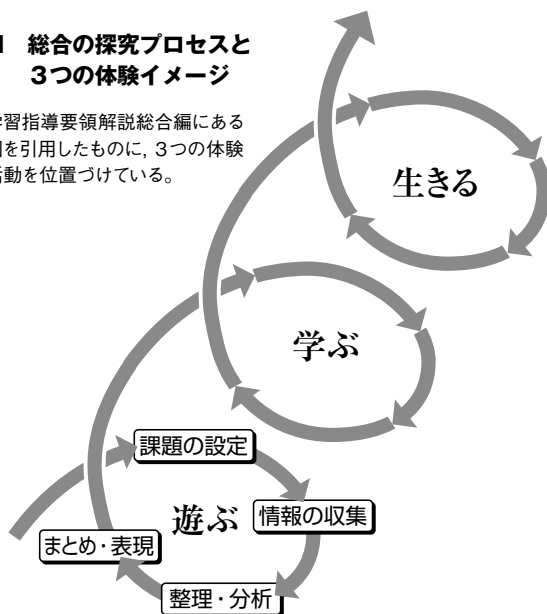
生活科の研究・実践を行ってきた私が、総合に抱いていた思いである。もっと子どもが夢中になれる、学習対象の魅力を存分に味わえる、学習課題に切実になれる体験をさせたいと思っていた。遊びには、その可能性を秘めていると考えていた。しかしながら、遊びだけでは、総合の目標である「自己の生き方を考える」に到達することはできない。

そこで私は、図1のように、総合の学習プロセスに「〇〇と遊ぶ体験」「〇〇を学ぶ体験」「〇〇とともに生きる体験」(※〇〇には、主に学習対象が入る)の3つの体験を位置づけた。

「〇〇と遊ぶ体験」とは、単元を通してかかわる学習対象と十分にふれ合う体験である。この段階では、子どもを学習対象の魅力に存分に浸らせ、その価値を十分に感じさせていく。ここで、たっぷりと

図1 総合の探究プロセスと
3つの体験イメージ

※学習指導要領解説総合編にある
図を引用したものに、3つの体験
活動を位置づけている。



時間をかけることや諸感覚を使って繰り返し遊ばせることが、子どもの思いや願いを膨らませることへとつながる。そして、この学習対象や学習活動への思いや願いが、その後の息の長い学習活動の基盤になるのである。

「〇〇を学ぶ体験」とは、これまでかかわってきた学習対象や、それに関する事物・現象について客観的・多面的に追究する体験である。ここでは、学習対象の価値ばかりでなく、学習対象が抱える問題や現実とのギャップなどにも出合わせていく。学習対象や学習課題に対して、自分からの視点ばかりでなく、多様な視点から見ていくことで、学習対象や学習課題の捉え方を広げていくことができる。そうして、子どもの思いや願いは、課題意識や目的意識を多く含んだものへと変容していく。

「〇〇とともに生きる体験」とは、これまでの活動で学んできた学習対象の価値や追究した事実などを基にして、学習対象とともに生きていくためにはどのようにすればよいのかを考え、実践していく体

総合の授業」

験である。ここでは、それまでに得てきた知識や技能等をフルに活用させ、自分やその周りの人々のために具体的に行動する。そうして、これまでの学びを自分の生活や考え方と結び付けることで、自分の生き方を考えることへと深めていくことができる。

このように、これら3つの体験を子どもの学びの文脈を大切にしながら、総合の探究的な学習過程に位置付ける。これが、私が思い描く、自己の生き方を考える体験プロセスである。

2 私の実践

(第3学年単元「附属探検隊 山へ行く!」全70時間)

本単元の学習対象は、里山である。里山とは、統一的な定義付けはなされていないが、田畑・民家・竹林・広葉樹林など、人が自然を利用した区域一体のことを指す。里山と遊ぶ体験、里山を学ぶ体験、里山とともに生きる探検を、次の表1のように具体化した。

表1 本単元における具体化

里山と遊ぶ体験
◦秘密基地作り ◦工作教室
里山を学ぶ体験
◦森林保全ボランティアの方の話 ◦インターネットや本を使った調べ活動
里山とともに生きる体験
◦除伐体験 ◦里山イベント(学習発表や緑の羽根募金等の啓発活動)

単元の目標は以下のとおりである。((○○○力)は、本校で設定している「育てようとする資質・能力」)

- ①野外体験活動や話し合い活動を基にして、その後に取り組み活動を主体的・協同的に見出すことができる(感じる力)。
- ②過去の経験やG Tからのアドバイス、インターネットや図書資料などを生かして、試行錯誤しながら自

分なりに工夫して必要な情報を得ることができる(調べる力)。

- ③自分と友達の取り組みや意見を比べて、共通点や差異点について考えながら取り組むことができる(考える力)。
- ④活動を通して、気づいたことや感じたことなどをわかりやすく、新聞やポスターなどにまとめることができる(伝える力)。
- ⑤自分の追究過程を振り返り、これからも自然とのつながりを大切にしようとする願いをもち、自分の生活に生かすことができる(生かす力)。

(1) 里山と遊ぶ体験の実際と考察

里山と遊ぶ活動として、雑木林の中での探検活動と秘密基地作りを設定した。秘密基地作りは、終日6時間を2回設定した。その間は、活動した雑木林から持ってきた材木を使って、2回目の秘密基地遊びに必要なものづくりを行った。その間、雑木林を管理する森林保全ボランティアの方々に工作教室を開いてもらい、竹を使った箸やコップ、箸置きを一緒に作る活動を設定した。



◀工作教室の様子



▼2回目の秘密基地作り

＜活動後の感想＞

- 屋根を作る時はとっても大変だったけど、（森林保全ボランティアの）〇〇さんが手伝ってくれました。となりの野イチゴ班もすてきで、おしゃれな屋根を作っていました。みんな、とってもいい秘密基地が作れたなと思いました。
- みんなと協力して、楽しく活動できたので、とてもよかったです。
- 出来上がった基地に入ってみると、森のとてもいい空気で、疲れがみるみるとれてきました。次は、親子で来て、昼ごはんを食べてみたいです。

このように、多くの児童が、里山の魅力や活動のおもしろさ、森林保全ボランティアの方々とのかわりについて述べた。したがって、里山と遊ぶ活動を通して、里山での活動のおもしろさを体感したり、山を維持しているボランティアの方々とのつながりを深めたりすることができたと考える。

（２）里山を学ぶ体験の実際

里山を学ぶ活動として、森林保全ボランティアの方による話とインターネットによる調べ活動を設定した。森林保全ボランティアの方による話では、主に、近年、里山が抱える課題について語ってもらった。また、インターネットによる調べ活動は、里山にいる生き物や保全の仕方について調べる活動を行った。



▲インターネットによる調べ活動

＜活動後の感想＞

- 里山の水辺には、カエル・オタマジャクシ・ドジョウ・タニシ・メダカ・トンボなど多くの生き物がすんでいることがわかりました。
- （森林保全ボランティアの）〇〇さんから、里山のゴミ問題や竹が増えすぎていることなどを教えてもらいました。生き物が減ってきていることを聞いて、

びっくりしました。

- 里山にすむ生き物を守るために、私も、何かしたいと思いました。

このように、里山のことを客観的に調べ、里山が抱える課題に出合わせることで、現実の理想のギャップから、「多くの生き物がすむ里山を守っていききたい！」「もっと里山のおもしろさを多くの人へ伝えたい！」という切実な願いへと高まっていった。

（３）里山とともに生きる体験の実際

里山とともに生きる活動として、雑木林の除伐体験と里山を守るイベント活動を設定した。除伐体験は、秘密基地を作った雑木林において、森林保全ボランティア団体の除伐活動に協力する形で実施した。

さらに、「多くの人に里山の素晴らしさを伝え、里山を守っていききたい」という願いを基に、「里山守ろうイベント」を企画し、開催した。イベントは、森林保全ボランティア団体に主催してもらい、その手伝いをするという形にした。イベントは、鹿児島一の繁華街、天文館にある広場を借りて実施した。イベント内容は、「１年間の里山学習の発表」「緑の羽根募金への協力（募金をしてくれた人には、除伐材を使った子どもたち手作りの小物を差し上げた）」「除伐材を使った工作体験」「里山クイズ」とした。このイベントに向けて、約２か月間、募金用の小物や看板を作ったり、学級発表のスライドや原稿を作成・修正したりした。



▲「里山守ろうイベント」の様子

「私と この子どもたちだからこそできる 総合の授業」

＜活動後の感想＞

- 私は、発表チームだったので、大勢の前で発表しました。最初はドキドキした気持ちでしたが、練習のときより間違わずに、落ち着いて読むことができたので、すっごくうれしかったです。
- 里山イベントが始まる前のチラシ配りで、たくさんの人がもらってくれました。無視する人もいて、社会は大変だと思いました。でも、イベントでは、1年間頑張ってきたことを発表出来てよかったです。

このように、多くの児童が、里山守ろうイベントを通して、達成感を得ることができた。緑の羽根募金に関し



▲雑木林の除伐体験

ては、鹿児島県の1日（1か所）での募金金額の記録を更新するという快挙まで成し遂げた。その他、学習発表を聞いた地域の方々から、多くのお褒めの言葉をいただいた。1年間かけて、里山の魅力を存分に味わった子どもたちだからこそできる発表や活動であった。

③実践を振り返る

「それって、君たちにしかできないことか？」

私が思い描いた総合の単元プロセス、「里山と遊ぶ体験」「里山を学ぶ体験」「里山とともに生きる体験」の中で、特に、この問いかけを行ったのが、「里



▲募金をくれた方へ小物の御礼

山を学ぶ体験」と「里山とともに生きる体験」の間における話し合いのときであっただろう。「里山守ろうイ

ベント」を開くという方向性が決まるまで、何度も話し合いを重ねた。単なる募金活動であれば、どのだれにでもできること。でも、募金してくれた人に、除伐材を使った小物を渡すことができるのは、私たちにしかできないことではないか。その他、里山クイズや除伐材を使った小物づくりコーナーなども、里山の良さを味わった自分たちだからこそできるものにしていこう。そういった子どもたちの思いが、さらにイベントへの意欲を掻き立てていった。

このように、言語活動によって、「〇〇と遊ぶ体験」「〇〇を学ぶ体験」「〇〇とともに生きる体験」をつないでいくことが重要である。子どもの関心や課題によって、これら3つの体験を連続的・発展的につなげていくことが、探究的な学習過程を形成していくことであると考ええる。

また、これら3つの体験によって単元構成を行っていくことで、総合の目標である「自己の生き方を考える」というステージまで、体験と言語の連続的過程を経て、たどり着くことができることも、本実践研究の価値であると考えている。

おわりに

子どもの力は、偉大である。簡単に大人を、社会をも動かす。教育の力とも言ってよい。総合は、これを最大限に発揮させる可能性を多いに秘めている。だからこそ、総合の授業は、創り出すことを大切にしたい。

私の宝である子どもたちとともに、1年間かけて作り上げてきたこの単元もまた、私の宝物である。そう思わせてくれた方々に、お礼を述べたい。森林保全ボランティア、かごしまみどりの基金、学級保護者の方々、その他多くの支えや教えをいただいた方々、ありがとうございました。

現在、5年生の子どもたちと、〇〇に「高齢者」を入れた「高齢者と遊ぶ体験」「高齢者を学ぶ体験」「高齢者とともに生きる体験」を仕組んだ単元を創り出している。いつかまた、報告させていただきたい。

スクリーンに輝く先生たち

～おすすめ“先生映画”あれこれ～

シネマアナリスト
まつかわ ゆま

邦画代表『二十四の瞳』

先生を主人公とした映画といえば、日本人の場合まず挙げるのが『二十四の瞳』だと思います。1954(S29)年の作品で、木下恵介監督、高峰秀子主演の映画です。原作は1952年に出た壺井栄の小説でした。

1928年、瀬戸内海の小豆島に赴任してきた新卒の女性教師、大石先生の半生を描く物語です。描いているのは1928年から1946年までで、ちょうど日本が世界大戦に突入り敗戦を迎えるまでの時代を背景にしています。

大石先生が赴任したのは岬の分校で、先生は大石先生と男先生の二人だけ。大石先生が最初に担当したのは12人の一年生。だから、24の瞳。その、まだなにものにも毒されていない、希望を映すまっすぐな瞳に向き合い、大石先生は習いたての理想的な教育を実践しようとします。子どもたちに寄り添い、人間として正しく豊かな感性を育てようという、大正モダニズム期の人道主義的教育です。何かを知ることを楽しいと感じること、ものを考えることをおもし

ろいと感じること、自分自身の感情や感性を発揮して表現することなどなど。大石先生の教育方法は、男先生が教えてきた方法とはだいぶ違います。けれど大石先生が分校まで洋服姿で自転車に乗って登校する颯爽とした姿は、この村の人たちにとっては新しすぎました。男先生や保守的な村の人々には反感をもたれてしまいます。けれど、子どもたちはもう、楽しくて、楽しくて。怖いところだった学校が大好きな場所と時間になってしまうのです。

そんなある日、遠足に行った先で、子どもたちが掘った落とし穴に引っかけた大石先生は足を骨折してしまい、それがもとで本校に転勤することになってしまうのです。

家で療養する大石先生に会いたさに12人の子どもたちは歩いて大石先生の家に向かいます。6歳の子どもの足では、歩いても、歩いても道は遠く、皆ベソをかきながら歩きます。そこに病院から戻る大石先生が乗ったバスが通りかかります。バスを止めて子どもたちを迎える大石先生。子どもたちも先生も泣いています。このシーンが前半のひとつのハイライトです。

後半は戦争の影が色濃くなり、それと並行して貧富の差が子どもたちの未来を引き裂いていく姿が描かれます。貧しさのため、奉公に出されたものの体



『木下恵介生誕100年 二十四の瞳』
DVD好評発売中 2,800+税
発売元:松竹 販売元:松竹
©1954/2012 松竹株式会社

DVDのジャケットや価格は、2017年2月現在

をこわして戻され死の床についている女生徒、進級をあきらめた優等生…。そして戦争は男生徒たちを戦場へと連れて行き、目が見えなくなった一人を残し全員の命を奪います。その子自身の資質や努力とは別に、決められてしまう未来。その度に大石先生は涙します。「ごめんね。先生、一緒に泣いてあげることしかできないの」と言って…。

『二十四の瞳』から見える日本の教育

『二十四の瞳』は1954年のキネマ旬報ベスト10の一位を獲得します。原作が出版された1952年は占領の終わった年であり、この年からしばらく、文学も映画も、戦争についてさまざまな角度から描く作品が登場しますが、『二十四の瞳』はその代表的な作品だと言われています。

つまり、日本人にとっての戦争は、被害者としてのもので、国民は暴走する軍部にだまされ犠牲にされたのだ、という考えです。『二十四の瞳』の大石先生の涙は、そんな被害者である日本人の、犠牲者を悼む涙として流されたものなのです。だから、当時『二十四の瞳』は国民的に気持ちよく泣ける作品として受け入れられて、今も泣く人が多くいるのですね。

実はここに、日本の教育のひとつの特徴があると思います。つまり、日本の教育は「自分の考えをもち行動する個人」を確立するためのものではなく、伝統的に「みんな」で「きまり」を「まもる」「集団」のメンバーにするためのものなのではないでしょうか。大石先生は一人一人を生かす教育を目ざしますが、時代と世間に抗うことは結局何もできず、貧困にも戦争にも「一緒に泣くことしかでき」ません。

『二十四の瞳』は1946年以前の教育を描く作品です。52年の占領終了後は「戦後の教育は変わった、「個」を確立し「民主主義」の主人公になる「個人」を育てるのだ」と民主主義教育に燃える「教育映画」の花盛りになりましたが、現在その作品群はほぼ忘れ去られ、国民的映画として残ったのはやはり『二十四の瞳』の方なのです。

洋画から見える欧米の教育

1945～52年の間日本を占領し、民主主義を根付かせようとしたのはアメリカでした。しかし、この時期、アメリカでも大きな変化が起きていて、それが映画にも表れています。民主主義と平等を建前に掲げた社会に、経済的な格差、人種差別などが表面化してきて、先生と生徒が対立する『暴力教室』(55年)のような、戦後の価値観と社会の変化を下敷きにした少年たちの反抗を描く映画が登場したのです。

ちょっとここで考えておきたいのが、ヨーロッパとアメリカの教育制度・教育理念の違いです。簡単に言ってしまうと、ヨーロッパではエリート教育と一般教育・職業教育が分けられ、公教育の中で存在しています。たとえばイギリスのように、戦後になって、戦前は「身分」がまず問われたエリート教育に一般人も挑戦することができるとされながら、実質的には富裕層であるか、またはよっぽど恵まれた才能がなければ、そこには入れないことになっています。ただし、そのかわり技術者・職人に対して、学問のエリートと同様のリスペクトがあり、それが、ヨーロッパの教育制度を支えているのだと思います。

ヨーロッパでは小学校の内に、将来どんな道に進もうと、個人として主張し選択する市民になるために、自分で考える訓練を徹底的に行います。それができる個人であれば、仕事はなんであれお互いにリスペクトされるのです。だから小学校教育を描いた映画に、『僕の好きな先生』(03年)のようなドキュメンタリーも含めて秀作が多いのだと思います。ただし、ここ何十年かの世界情勢の変化、さまざまな人々の流入によって、このシステムは、エリート層を切り離し一般教育・職業教育の学校に「アメリカ教育化」をもたらしているようです。その「アメリカ教育化」というのは、建前として平等な教育の機会を、義務教育年齢の全員に与えることです。ただし、これは私立の学校には適用されません。実際にはエリート教育は私立学校によって行われています。つま

り公教育の場では、「人種・宗教・収入・暮らしている地域などによって区別をしてはいけないという建前」を「無理やり守る」わけですね。アメリカ映画における「先生映画」はここにターゲットを合わせています。「先生映画」とは、先生の指導がきっかけになって、底辺にいる生徒たちが自らの力を発見し、可能性をつかむという物語です。

2月に公開され、今年のアカデミー賞でも話題を呼んだ『ラ・ラ・ランド』という映画があります。女優志願のヒロインがオーディションに行きます。それが学園ものの映画で、先生の役らしい。彼女の言い方だと『OC』と『デンジャラス・マインド』を足したみたいな映画』なのですが、この『デンジャラス・マインド』というのが「先生映画」なのです。邦題は『デンジャラス・マインド／卒業の日まで』(95年)。海兵隊出身の女性教師が赴任し、不良とレッテルを貼られた生徒たちに熱意をもってぶつかっていくという話。アメリカの「先生映画」のひとつのパターンです。

アメリカ映画と熱血先生

アメリカでは、州によって違いますが基本的に高校までが義務教育。公立学校は無償です。つまり社会の格差がそのまま反映され、教育を受けることに希望をもたない生徒も高校に通わなければならないということです。しかし、少なくとも高校を卒業しなければ社会に受け入れられませんし、逆にいい成績をとって進学すれば底辺から抜け出す希望がもてるのも高校教育です。そこで、高校で教育を受けることが未来に希望をつなぐことだとは思えない生徒たちを、どうにか卒業させようとか、進学する可能性を与えようとか、あの手この手で熱血指導する先生が登場する映画が作られます。中には『デンジャラス・マインド…』のような実話ものも多く、ヒットしています。

この「熱血先生」パターンの場合、まずは生徒たちに授業に興味をもってもらうため教材に工夫を凝らします。『落ちこぼれの天使たち』(88年)のように英語の授業でポルノを読ませてみたり、『フリーダム・ライターズ』(07年)のように自分の日記を書かせてみたり、『デンジャラス・マインド…』のように海兵隊仕込みの空手でクラスのボスをのして見せたりします。

もうひとつの方法は、自己肯定感の希薄な生徒たちに自信をもたせることです。リスペクトされたことのない彼らに、教師が彼らの尊厳を守って接することを示そうと『フリーダム・ライターズ』のヒロインのように、スカートにパンプス、パールのネックレスという“正装”で毎日教室に現れるとか、名前に尊称をつけて呼ぶ、などの方法です。やがて、生徒たちが教師を認め、学ぶことへの興味をもち、自信をつけると彼らがもっていた可能性が開花します。

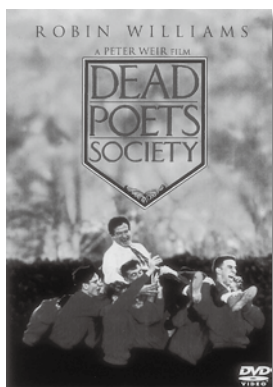
「熱血先生」は新人教師であることが多く、しかも異業種からの転身組だったりして、学校現場の「常識」にとらわれない人たちです。だから学校の管理者や先輩教師たちには煙たがられます。彼らは、自分たちにとってお荷物でしかない問題児クラスを新任の主人公におしつけるのです。主人公が、「不良」という偏見でレッテル貼りされていた生徒たちの可能性を見つけ出すと、この先輩や管理側はそれをつぶしにかかります。ここで「熱血先生」と「不良と呼ばれた生徒たち」がタッグを組んで、学校・教師・社会・偏見に戦いを挑むのが、後半の見せ場になっていくわけです。

最後には、生徒たちは見事な成績で卒業したり、進学したりして、このクラスの生徒はダメ人間だと決めつけていた人たちの鼻を明かすのです。そして、日本映画とはここが違うのですが、勝利するのは個人です。クラス一丸となって戦ったとしても、その勝利は一人ずつ違い、生徒一人ずつが自分の勝利を

スクリーンに輝く先生たち ～おすすめ“先生映画”あれこれ～

つかむのです。それは民主主義とは主体性をもった「個人」が基本になっているからであり、生徒たちは戦いを通してそれを学ぶわけですね。例えそれで先生が首になったりしたとしても、戦いは「熱血」組の“結果的な”勝利になります。なぜなら、彼らの勝利は本になり出版されるなどしてメディアに乗り、ハリウッド映画化されて、世界に広まっていくからです。

私が愛するとおき作品



『いまを生きる』
DVD発売中 1,429円+税
©Touchstone Pictures.
発売/ウォルト・ディズニー・ジャパン

の朝』(02年)のように先生の理想はエリート生徒のずるがしこい罠にはめられて敗北してしまうという現実的な作品（ただし、最後の最後にもうひとひねりありますが）もあり、ひとくくりにはできません。

では、こんな各国の「熱血先生」の人生は？ という映画も、3回も映画化された『チップス先生さようなら』のように「先生映画」のひとつのパターンになっています。中でも私が好きなのが『陽のあたる教室』(95年)という作品です。作曲家になったかったけれど生活のため音楽教師になった男ホルンが、30年間教師として音楽を教え続けた半生を描きます。1965年から95年というアメリカ激動の時

おもしろいのは、同じ「熱血先生」ものでも舞台がエリート校になると実話ものが無くなるところ。型破りな先生がエリートになることのプレッシャーに押しつぶされそうな少年たちに、自由に生きることを教える『いまを生きる』(89年)など、感動的な作品も少なくないのですが、『卒業



『陽のあたる教室』
DVD発売中 ¥1,419+税
20世紀フォックス ホームエンターテイメント ジャパン

し導きます。その間、私生活では、息子の耳が不自由だとわかって悩み、仕事にかまけて家族をないがしろにしていると妻に責められ、それでも毎日生徒たちと向き合っていきます。けれど、州の教育予算が削られ、芸術系の授業がカットされ、彼は仕事を失います。そして最後の日。ホルンは自分が積み重ねてきたことが何であったのかを知るのです。

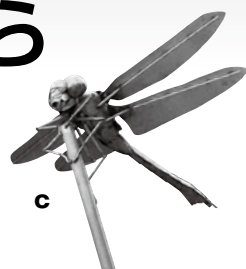
私は芸能系の専門学校で映画鑑賞の授業を担当していますが、その最後の授業で必ずこの作品を見せます。自分が平凡だと思っていた日々がどれだけ大切なものであったのか、芸術は人の人生に何をもたらすことができるのか。それをこの作品を通して考えてほしいからです。芸術にも先生にも、できることやしなくてはいけないことがたくさんある。なんて素敵な仕事なのでしょう、と私は毎年思っているのです。

まつかわゆま プロフィール

1960年、ドキュメンタリー映画作家・松川八洲雄の長女として東京に生まれる。大学卒業後、雑誌の編集者を経てフリーライターに。“映画を通して時代を読む”をモットーに、映画祭の審査や映画解説・エッセイの連載、ラジオDJなどで活躍。著書に『映画ライターになる方法』（青弓社）、『シネマでござようさま』（近代映画社）など。

ときめきの美 いま 練馬から

館長 若林 寛



練馬区立美術館について

練馬区立美術館は1985年10月に開館、32年目を迎えています。当館は、これまでに、日本の近・現代美術を中心に176の企画展を開催。最近近世、西洋にも触手を伸ばしています。コレクションも、

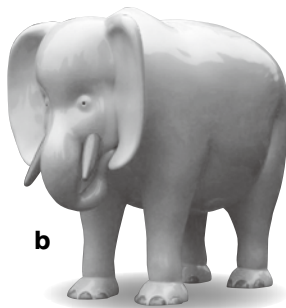


寄託を含め7000点の重厚・軽妙・多彩な布陣となっています。また、開かれた美術館を目ざしており、皆様にご利用いただけるギャラリーや、創作室もますます活況を呈しています。

開館30周年の一昨年には、「小林清親^{きよちか} (版画・肉筆絵画)」「舟越保武^{やすたけ} (彫刻)」「アルフレッド・シスレー (印象派)」「歌川国芳 (浮世絵)」展を開催、過去最高の14万人のお客様にお越しいただきました。とりわけ、舟越保武展には皇后陛下のご行啓を仰ぎ、各方面から注目されました。

本年(2017年)は、練馬区独立70周年にあたります。今年は、「19世紀パリ時間旅行—失われた街を求めて」「生誕150周年 藤島武二」「没後20年 麻田浩」「ポスターアートの巨匠 サヴィニャック」(パリ以外は仮称)を予定、開館30周年を上回る賑わいを画策しています。

当館は、西武池袋線の中村橋駅至近。

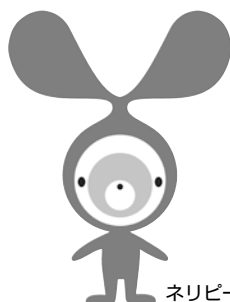


徒歩3分の「練馬区立美術館」に足を運んでみてください。エキサイティングな美の世界がお待ちしております。

美術の森緑地

～美術の森に、不思議な動物たちが住みついた～

開館30周年の年に、美術館に隣接する緑地が生まれ変わりました。その名も「練馬区立美術の森緑地」。天然芝を敷きつめた園内に潜むのは、20種類・32体のファンタジーな彫刻群。誰もが知っている動物が、誰も見たことのないアートになりました。見て触れて想像をめぐらせる、ここはいわば「幻想美術動物園」。美術館入り口の手前で、新しいトキメキに出会えます。美術館のロゴ・マークから生まれた「ネリビー」が案内役をとめます。

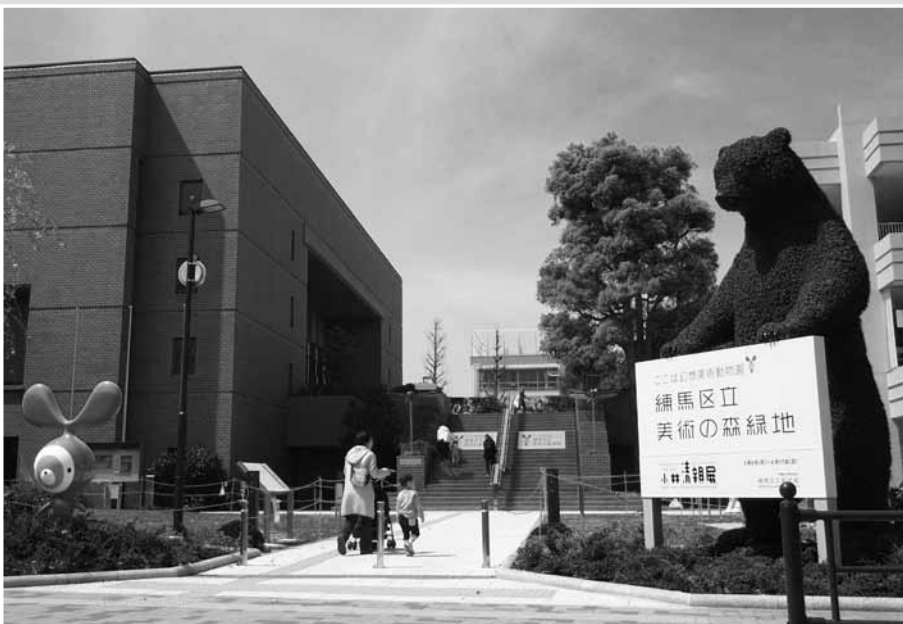


美術の森緑地の彫刻群
a ライオン
b ゾウ

マスコミやネットで取り上げられ、年間延べ80万人(練馬区人口72万人)のお客様にご利用いただきました。練馬に新しい名所が誕生しました。

c トンボ
d ゴリラ
e キノコ





4mのクマがお出迎えする練馬区立美術館

教育普及事業

教育普及事業は、展覧会事業と並ぶ美術館の2大事業です。展覧会毎に、講演会、ギャラリートーク、読み語り、コンサートなど多彩な事業を展開しています。

また、団体鑑賞、職場体験の受け入れ、ティーチャーズデイ（先生方向けのギャラリートーク）、学校への出前授業（学芸員による）、トコトコ美術館（幼児向け）などを実施しています。

とりわけ、2015年から小学校向け無料送迎バスを導入し、利用が広がっています。トータル参加者も5,200名を超え、拡大の一途を辿っています。皆様方の積極的参加をお待ちしています。

キャッチフレーズ、ロゴ・マークについて

より多くの区民や美術ファンに愛される美術館へ、そのことが練馬区民の誇りとなり自慢となる美術館へ。この思いを示すため、2010年の開館25周年を機に、練馬区立美術館のキャッチフレーズとロゴ・マークを作成しました。

キャッチフレーズ

練馬区立美術館は、近・現代という『いま』を生きている美術作品を中心に、美を「みる・みせる・つくる」、つまり「鑑賞・発表・

制作」という美術館の機能をフル活用し、活動が続けてきました。ほかの美術館とはちょっと異なる斬新な視点・大胆な切り口で新たな美の知見を広げ、独自性を追求。練馬区民にとっては、まちの誇りとなる「わがまちの美術館」でありながら、広く美術ファンにとっても、つねに『いま』の輝き、『いま』のときめきが待っている美術館と

して気になる存在でありつづけたい。そんな思いをこめた、新しいミュージアムメッセージ。それが『ときめきの美 いま 練馬から』です。『いま』をときめく美術作品に、心ときめいて欲しいと願っています。

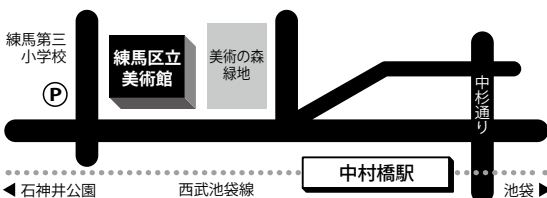
ロゴ・マーク

当館のキャッチフレーズ「ときめきの美 いま 練馬から」を形にしました。公募により最優秀作品に選ばれた和久井遥さん（日本大学芸術学部大学院）の作品をベースにデザインしています。



1粒の種が芽吹いて実となっていく「誕生から実り」をイメージ。地域に根付いた美術への思いが、「今をときめく美となって、多くの人々の心をとくめかす」そんな存在になって欲しいとの願いをこめています。黄色は“種・エネルギー”、緑は“伸びゆく芽”を表現しています。

練馬区立美術館 NERIMA ART MUSEUM



- 東京都練馬区貫井1-36-16（西武池袋線・中村橋駅 徒歩3分）
- TEL: 03-3577-1821（代表）
- 開館時間：午前10時～午後6時（入館は原則として午後5時30分まで）
- 休館日：月曜日（月曜日が祝休日のときはその翌平日）
 - 年末年始（12月29日～1月3日）
 - 展示準備期間

<http://www.neribun.or.jp/museum.html>

紙上絵画展 練馬区立美術館のコレクション

—名品と、子どもを描いた作品を中心に—

いけの たい が
池 大雅「比叡山真景図」
 (1762年 紙本墨画淡彩、作家・五味康祐旧蔵)

池大雅(1723 - 76)は江戸時代中期に活躍した文人画家。友人(詩人)と比叡山に登り、その詩の内容を絵にして贈った。50年間、所在不明だったが、練馬区在住の作家、五味康祐の書斎に掛かっていたのが発見され、当館に遺贈された。



まつ おか えいきゅう
松岡映丘「さつきまつ浜村」
 (1928年 絹本着色・六曲一隻)

松岡映丘(1881 - 1938)は兵庫県生まれ。民俗学者、柳田國男の弟。有職故実を基にした古典美を追求、独自の「やまと絵」を完成させた。2011年「生誕130年 松岡映丘」展を開催。

えせ きかい
中村 宏「似而非機械」
 (1971年 油彩・カンヴァス)

中村宏(1932 -)は静岡県生まれ。政治・社会問題をテーマに、誇張された遠近法とクローズアップで物語性ある作品を描きつづけている。戦後現代美術、前衛美術の旗手。最近では欧米美術界からも注目されている。1996年「ねりまの美術 池田龍雄、中村宏」展、2010年「タブローマシン(図画機械) 中村宏の絵画と模型」展を開催。





高松次郎「影」

(1978年 アクリル・カンヴァス)

高松次郎(1936 - 98)は中西夏之、赤瀬川原平とともにハイレッドセンターを設立、反芸術的パフォーマンスを展開、活動領域は絵画、彫刻、壁画、写真、インスタレーションにまで及ぶ。とりわけ、実体のない影を描いた一連の絵画シリーズは話題を呼んだ。



北川民次「姉弟」

(1949年 油彩・カンヴァス)



深沢紅子「踊る」

(1981年 油彩・カンヴァス)

深沢紅子(1903 - 1993)は岩手県生まれ。二科会、一水会で活躍、女流美術家協会の創設メンバー。淡い色彩による柔らかな抒情性あふれる肖像画を得意とした。1992年「ねりまの美術 齋藤長三、深沢紅子」展を開催。

北川民次(1894 - 1989)は静岡県生まれ。若くしてアメリカ、メキシコに移住、1936年帰国、二科展に出品を続ける。人間・植物などの生命感を力強く描く。美術教育にも熱心で、「絵を描く子供たち」「子供の絵教育」の著書あり。

練馬区立美術館には常設コーナーがありません。いつも、ご覧いただけないのが残念ですが、時折「コレクション展」を開催します。

2月23日から4月9日の会期で「お蔵出し！ 練馬区立美術館コレクション展」を開催。池大雅、松岡映丘を含め120点を展示しました。

その時々テーマに沿って、作家・作品を選別・展示しますのでホームページなどでチェックいただければ幸いです。



紙上絵画展 練馬区立美術館のコレクション



大沢昌助「公園」
(1948年 油彩・カンヴァス)

大沢昌助(1903-1997)は当初、二科会で活躍、リアリズム絵画に始まり、晩年は「みすみすい色とフォルム」に満ちた、抽象・具象を突き抜けたスタイルを完成させた。当館では100点の作品を所蔵。2003年「生誕100年 大沢昌助一家族の肖像」展、2015年「芸術化の家 大沢昌助と父三之助」展を開催。

生活科・総合通信 そよかぜ通信 【2017年 春号】2017年3月31日 発行

表紙イラスト:うつみのりこ

編集:教育出版株式会社編集局
印刷:大日本印刷株式会社

発行:教育出版株式会社 代表者:山崎 富士雄
発行所:教育出版株式会社

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町2-10 電話 03-3238-6864 (内容について)
URL <http://www.kyoiku-shuppan.co.jp> 03-3238-6901 (配送について)



なかよし宣言

わたしたちをとりまく自然や社会は、科学技術の進展や国際化、情報化、高齢化などによって、今、大きく変わろうとしています。このような社会の変化の中で、人間や地球上のあらゆる命がのびのびと生きていくためには、人や自然を大切にしながら、共に生きていこうとする優しく大きな心をもつことが求められています。

わたしたちは、この理念を「地球となかよし」というコンセプトワードに込め、社会のさまざまな場面で人間の成長に貢献していきます。

- | | | |
|-------|-----------|---|
| 北海道支社 | 〒060-0003 | 札幌市中央区北三条西3-1-44 ヒューリック札幌ビル6F
TEL: 011-231-3445 FAX: 011-231-3509 |
| 函館営業所 | 〒040-0011 | 函館市本町6-7 函館第一ビルディング3F
TEL: 0138-51-0886 FAX: 0138-31-0198 |
| 東北支社 | 〒980-0014 | 仙台市青葉区本町1-14-18 ライオンズプラザ本町ビル7F
TEL: 022-227-0391 FAX: 022-227-0395 |
| 中部支社 | 〒460-0011 | 名古屋市中区大須4-10-40 カジウラテックスビル5F
TEL: 052-262-0821 FAX: 052-262-0825 |
| 関西支社 | 〒541-0056 | 大阪市中央区久太郎町1-6-27 ヨシカワビル7F
TEL: 06-6261-9221 FAX: 06-6261-9401 |
| 中国支社 | 〒730-0051 | 広島市中区大手町3-7-2
あいおいニッセイ同和損保広島大手町ビル5F
TEL: 082-249-6033 FAX: 082-249-6040 |
| 四国支社 | 〒790-0004 | 松山市大街道3-6-1 岡崎産業ビル5F
TEL: 089-943-7193 FAX: 089-943-7134 |
| 九州支社 | 〒812-0007 | 福岡市博多区東恵比寿2-11-30 クレセント東福岡 E室
TEL: 092-433-5100 FAX: 092-433-5140 |
| 沖縄営業所 | 〒901-0155 | 那覇市金城3-8-9 一粒ビル3F
TEL: 098-859-1411 FAX: 098-859-1411 |